

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380665

研究課題名(和文) 韓国の「文化」テキストの越境とコリアン・ディアスポラにおける変容

研究課題名(英文) Trans-Korean Cultural Text and Change in Korean Diaspora

研究代表者

梁 仁實 (YANG, Insil)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20464589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では韓国(朝鮮半島)で作られた「文化」テキストが越境する際、コリアン・ディアスポラ・コミュニティのなかでどのような交渉過程を経て受容されていたのかについて社会学的視点から明らかにすることを目的とした。この研究から得られた知見は、1) 先行研究などにおいては1965年の日韓基本条約により日韓及び両国と在日朝鮮人との関係が変化を迎えていたとされていたが、本研究では1964年の東京オリンピックが韓国の「文化」テキストを在日朝鮮人側に受容させる大きな役割を果たしていたこと、2) 帝国日本において作られた「文化」テキストの越境には在朝日本人及び在日朝鮮人側の存在が大きかったこと、である。

研究成果の概要(英文)：This research make it clear from a sociological approach when the Korean 'cultural text' crosses the border how was it changed in the Korean diaspora community and via what kind of course of the dealing it was accepted. From the research, I got from this study is following two. 1) It was Tokyo Olympic Games in 1964 that Korea and Japan played the important role in a relation between the Korean resident in Japan. 2) Japanese resident in colonial chosen and Korean resident in Japan was big helper of the border of cultural text in Imperial Japan.

研究分野：社会学

キーワード：「文化」テキスト 越境 日韓 コリアン・ディアスポラ 「在日」

1. 研究開始当初の背景

本研究者は今まで戦後日本映画における「在日」表象や戦前帝国日本映画において在日朝鮮人がどのように表象され、植民地朝鮮がどのように認識され、描かれていたのかについて研究してきた。これらの研究テーマに取り組んでいる際に、映画における「在日」表象や朝鮮の描かれ方が単なる文化商品や文化表象のフレームだけでは考えることができないことに気づいた。本研究はこのような問題意識からある地域で作られた文化テキストが国境を越え、ナショナルな境界の外に出て、もう一つのエスニックコミュニティと出会ったとき、そこではどのような文化政治が働くのであろうかについて考えるための試みでもあった。

2. 研究の目的

本研究は韓国で作られた映画や演劇などの「文化」テキストがコリアン・ディアスポラ・コミュニティのなかでどのように置き換えられ、交渉され、受容されていたかについて調査し、グローバリゼーションとローカリゼーションの重層的かつ複合的な交渉過程を、社会学的視点から明らかにすることを目的とするものである。

3. 研究の方法

本研究では、まず、文化商品の越境のプッシュ要因として韓国映像資料院や韓国の国会図書館などに行き、韓国の過去の文化政策について調べた。そして、これらの作品が越境すると、現地のいわゆる「同胞」コミュニティのなかに先に受容され、変容されていく様子を主に日韓の関係から考察した。そのために、韓国政府が出した白書、在日朝鮮人のエスニック雑誌、映像作品、日本のメディアの反応などを調べた。

4. 研究成果

本研究では韓国（朝鮮半島）で作られた「文化」テキストが越境する際、コリアン・ディアスポラ・コミュニティのなかでどのように置き換えられ、どのような交渉過程を経て受容されていたのかについて社会学的視点から明らかにすることを目的とした。この研究から得られた知見は、以下のようなものである。

1) 先行研究などにおいては戦後直後から国交が断絶状況であった日韓が1965年の日韓基本条約をきっかけに外交関係を正常化し、これ以降日本、韓国、在日朝鮮人（とりわけ、在日韓国人）の関係が変化したとみてきたが、本研究では1964年の東京オリンピックがそのような役割を果たしていたことを明らかにした。東京オリンピックはアジアで初めて開かれる大きな世界的大会であり、韓国からみると日本を訪れる外国人を韓国に呼べる機会でもあった。また、韓国政府は日本にいた居留民団の支援のもと、ナショナルチームがよい成績を収めると、北朝鮮との対峙関係で優位を示すことができると思っていた。1962年に設立された韓国国際観光公社（現、韓国観光公社）はこういう韓国政府の意向を反映するものであった。また民団は韓国ナショナルチームを支援することで韓国政府との関係を強固なものとし、日本のなかでは朝鮮総連との対峙のなかで少しでも好印象を残そうとしていたのである。

本研究では韓国国際観光公社が編纂し日本語で発行していた雑誌『ニューコリア』を対象に、韓国側、在日側、日本側が東京オリンピックにどのような期待を寄せていたのかを明らかにしたのである。そして、韓国で作られた「文化」テキストは居留民団の積極的支援のもと日本のなかで受容されはじめた。

2) こうした受容過程は戦後に始まったこ

とではなく、戦前帝国日本においても始まっていた。帝国日本において、内地日本で作られた映画や演劇は植民地朝鮮に住んでいた日本人（在朝日本人）によって変容される、あるいは受容された。また植民地朝鮮において作られた「文化」テキストは在日朝鮮人コミュニティによって受容されていた。さらに、植民地朝鮮で資本と娯楽性を必要としていた映画産業に従事していた在朝日本人たちは常に植民地支配側の朝鮮総督府と亀裂と拮抗関係に置かれていた。また朝鮮映画を受容しようとしていた内地日本の映画産業関係者たちは在日朝鮮人を主な観客として想定すると、常に在日朝鮮人コミュニティを監視し、管理しようとしていた内務省や警察側とは対峙する結果となった。

3) これらの研究結果からさらにいえることは、これらの研究では帝国日本を横断していた「文化」商品の越境にかかわっていた「遠隔地ナショナリズム」ともいえるこうしたネットワークは 戦後 も日韓において、国民-国家を確固たるものとする場において強く働きかけていたことも明らかにした。例えば、在日コリアン・コミュニティへの慰問公演は韓国政府のレベルで送り出され、エスニックグループのなかで消費されていたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 9 件)

梁 仁實「1970 年代「在日」映画における『在日』二世の居場所 映画『異邦人の河』を中心に」メディア/大衆文化の日

本・韓国—失われた朝鮮映画を求めて (2017 年 2 月 24 日、佐賀女子短期大学)

梁 仁實「1980 年代を記憶することの不可能性」(第 8 回世界韓国学大会、2016 年 10 月 5 日 8 日、アメリカ・ペンシルベニア大学、口頭発表) 査読有 (国際学会)

③ 梁 仁實「韓国映画『未亡人』(1955) からみる戦争と女性の生き方」国際シンポジウム『文学と芸術における宗教・民族をめぐる問い』(2016 年 7 月 9 日 10 日、岩手大学、口頭発表) 査読無

梁 仁實「植民地朝鮮映画のなかのダイグロシア」(国際シンポジウム『無名な書き手のエクリチュール』、2015 年 12 月 21 日、岩手大学、口頭発表) 査読無

梁 仁實「二つの青春と双曲線」(東京フィルムセンター韓国映画祭招待講演、2015 年 12 月 6 日、東京国立近代フィルムセンター) 査読無

梁 仁實「文化資本とソウル—ソレマウルを中心に」(獨協大学シンポジウム、2015 年 11 月 14 日、招待講演、獨協大学) 査読無

梁 仁實「帝国日本の小国民言説と『授業料』の映画化」(国際高麗学会世界大会、2015 年 8 月 18 日 21 日、オーストリア Wien 大学、口頭発表) 査読有 (国際学会)

梁 仁實「日本映画のなかの韓流ブームとノスタルジア の遭遇、そして在日朝鮮人」(第 27 回ヨーロッパ韓国学大会、2015 年 7 月 10 日 13 日、ドイツ Bochum 大学、口頭発表) 査読有 (国際学会)

梁 仁實「越境する文化テキストとコリアン・コミュニティの役割」(第 7 回世界韓国学大会、2014 年 11 月 6 日、ハワイ大学、口頭発表) 査読有

〔図書〕(計 6 件)

梁 仁實「韓国女性映画人の戦争と<戦後>」中里まき子編『文学における宗

教と民族をめぐる問い』、2017、朝日出版社（総 112 頁のうち、89 頁-99 頁担当）

梁 仁實「戦時統制下の『最後の映画年鑑』と朝鮮/映画の場所」韓国映像資料院韓国映画史研究所編『日本語雑誌からみる朝鮮映画 7』、2016、現実文化研究（韓国、総 335 頁のうち 308-314 担当）

③ 梁 仁實「映画『授業料』の受容 児童映画から『小国民』の物語へ」中里まき子編『無名な書き手のエクリチュール 3.11 後の視点から』、2015、朝日出版社（総 126 頁のうち 87-95 頁担当）

④ 梁 仁實「『母性愛』の越境 日韓映画交流前史」山本浄邦編『韓流・日流 東アジア文化交流の時代』2015、勉誠出版（総 341 頁のうち 151-184 頁担当）

梁 仁實「帝国日本映画における朝鮮映画へのまなざし」山泰幸編『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』2015、ミネルヴァ出版（総 344 頁のうち 145-172 頁担当）

梁 仁實「統制と管理の側面からみた映画国策」韓国映像資料院韓国映画史研究所編『日本語雑誌からみる朝鮮映画 5』2015、現実文化研究（韓国、総 363 頁のうち 349-358 頁担当）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

梁 仁實 (YANG, Insil)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20464589